

IV. 日常的な医療的ケア

3. 座薬の使用

3. 座薬の使用

目的

小児で使用されている座薬には、解熱用座剤、抗てんかん薬坐剤、抗嘔吐用座剤、抗生物質の座剤などがあります。ここでは使用されることの多い解熱用座剤と抗てんかん薬坐剤について説明いたします。

解熱用座剤：以前にはアスピリン、ボルタレンなども鎮痛解熱薬として使用されていましたが、現在小児において一般的に使用されている解熱薬はアセトアミノフェン（アンヒバ、アルピニーなど）です。通常38.5℃以上の発熱時に使用するのが目安ですが、発熱の原因、程度、解熱剤を使用するメリットとデメリットを良く考えて使用するべきです。

抗てんかん薬坐剤：ジアゼパム座剤（ダイアップ）、抱水クロラル座剤（エスクレ）、フェノバルビタール座剤（ワコビタール）などがあります。このうち最もよく使用されるのはダイアップであり、発熱時けいれんの予防に使うことがよく行われます。ダイアップは比較的吸収が早いですが、効果の発現までには30分程度かかり、現在おこしているけいれんには間に合わないことがほとんどですが、けいれんの再発に関しては効果があると思われます。熱性けいれんの予防に解熱用座剤と併用されることも稀ではありませんが、この場合先にダイアップを使用し、30分以上あけて解熱用座剤を使用します。先に解熱用座剤を使うとダイアップの吸収が悪くなるからです。

3. 座薬の使用

手順

1. 投与量の確認：

解熱用座剤（50 mg、100 mg、200mg）にも抗てんかん薬坐剤（ダイアアップ4 mg、6 mg、10 mg；エスクレ 250 mg、500 mg；ワコビタール 15 mg、30 mg、50 mg、100 mg）にも量の異なる製品があり、注意が必要です。ナイフやはさみで半分にして使用する場合があります。

2. 長く持っているると溶け出すのでガーゼなどでもち、手早く挿入しましょう。オリーブオイルなどを用いると挿入が容易になります。挿入後はしばらく肛門部を押さえてください。

3. 座剤の挿入が刺激となり排便してしまった場合、数分以内で座剤がそのままの形で出ていればもう一度新たに座剤を挿入します。すでに溶けて便の中に座剤の形が見られなければ、そのまま経過を観察します。

基礎知識

座剤とは治療効果を示す医薬品を基剤に均等に溶解させ、一定の形に成型し、肛門に挿入して用いる外用薬の一つです。体温や分泌液により徐々に溶け出し肛門周囲への局所作用を呈するものと、直腸粘膜から吸収され全身作用を呈するものがあります。小児の場合には解熱剤など全身作用を期待した座薬の使用が大部分で、下記のような特徴があります。

1. 経口が苦手、不可能な場合（嘔吐、けいれん、意識障害など）にも使用できる。
2. 食事に関係なく投与が可能で、胃腸障害などの副作用が少ない。
3. 消化管や肝臓での代謝を回避できる。
4. 経口投与に比べ、吸収が速やかであるため効果の発現も速い。
5. 味やにおいの悪い薬剤でも投与可能である。